



カリブ海地域とカナダの文化

東京理科大学 教養教育研究院 葛飾キャンパス教養部 准教授

よし だ ゆたか
吉田 裕

滞 在 地：カナダ トロント

在 外 先：ヨーク大学

滞在期間：2022年4月1日～2023年3月31日



カリバナでの山車だしのひとつ。毎年八月に行われる。

■なぜヨーク大学（カナダ）を選んだか

私はカリブ文学の研究を専門としています。カリブ文学にはジャマイカやトリニダードといった場所にも西インド諸島大学（University of the West Indies）があり、同分野での重要な研究拠点です。さらに、イギリスの大学やアメリカの大学でも研究されていますので、選択肢は他にもあります。

では、なぜトロントを選んだかと言えば、いくつか理由があります。その最大のものが、まだCOVID-19の余波は続いていたなかで、在外研究のアポイントがもっとも取りやすかったということが挙げられます。すでに私の前に派遣予定であった先生方が、先方の受け入れ体制が整っていないということで、派遣を諦めたという事例が複数ありました。そのため、まずは受け入れ体制が整っているところを探すことが先決でした。

派遣先を検討している際、大学院生時代に留学経験のあったロンドン大学も念頭にありました。しかし、当時お世話になった教員は体調を崩しており、受け入れは難しく、また、イギリスの大学は在外研究員の受け入れの際に、高額な受け入れ料を要求するので、選択肢になりにくかったこともあります。

そこで、トロントの大学がいくつか思い浮かびました。以前、トロント大学の比較文学科が主催するシンポジウムで研究発表を行ったことがあり、そこでトロントのヨーク大学の教員と知り合うことができました。私の発表を聞いて、興味を持ったようで声をかけてもらいました。その後、幸運にも、個人的に連絡を取り

合うようになり、自宅にも泊めてもらうなどして親交を深めることができました。

その教員に連絡をとって見たところ、2021年の夏という比較的早い時期に受け入れ許可を得ることができました。あとはビザ取得の手続きを進め、東京理科大学からの正式な出発許可を待つばかりでした。

■カリブ海地域とカナダ

トロントという場所を選んだもう一つの理由は、私の研究対象であるカリブ文学と関わります。トロントを拠点として、カナダにはカリブ海地域の移民やその子孫が多く住んでおり、コミュニティが存在します。人びとも、頻繁にジャマイカやトリニダード、バルバドスと行き来があります。当然、作家や詩人も数多く居住しています。なぜでしょう？

北米とカリブ海地域には共通点と差異があります。それは、ヨーロッパ人が先住民から土地を奪った末に、現在の人びとが生活しているということです。北米の場合は、豊かな土地はイギリス人やフランス人が奪い、先住民を周辺に追いやりました。他方で、カリブ海地域の場合、17世紀半ばの時点で、先住民はほぼ全員虐殺されました。（興味深いことに、カナダでは映画上映の前や、大学でシンポジウムを行う前に、自分たちの土地がかつては先住民の所有していた場所であり、その恩恵と搾取のもとに現在があることを宣言します。）

その後、代わりとなる労働力として、北米とカリブ海地域には、人びとがアフリカ大陸から奴隷として大量に連れてこられました。歴史家によれば、カリブ海地域に限っても、1,000万から1,500万人にのぼる人びとが奴隷として連れてこられたとされています。

その後、19世紀以後になると、北米とカリブ海地域は政治・経済構造の格差が広がり、従属関係ができあがります。ピーター・ジェイムズ・ハドソンという研究者によれば、1834年にイギリスの領土で奴隷制が廃止されて以後、とりわけ19世紀後半から20世紀前半にかけて、カリブ海地域の政治的・経済的な構造は、合衆国やカナダの銀行によって支配されるようになりました。そこには、奴隷制時代から存続する差別意識が継続しており、カリブ海地域独自の銀行や経済発展を妨げるために、軍事的な支配をはじめとする様々な介入が存在しました。

1960年代以降、英語圏カリブ海地域の多くは、イギリスから独立します。かつて植民地であった国々は、

教育や産業、公共のインフラなどが十分に整っていません。サトウキビやタバコ、スパイスなどを大農園で大規模生産してきたため、社会の中心構造にはプランテーションがあるのです。一部のエリートを除く大多数の国民にとっては、そうした場所での労働が生活基盤でしたので、独自の産業や文化を育成する下地が整っていませんでした。さらには、ジャマイカやガイアナでは、ボーキサイトの採掘が大規模に行われていました。第二次世界大戦をはじめとする戦争の際に、英国にとって必要であった戦闘機の原材料だったのです。植民地支配が行われていたこれらの場所では、一次製品の輸出に経済が依拠しており、イギリスをはじめとするヨーロッパや北米の企業に都合の良い形での社会経済構造が作られてしまっているのです。

その埋め合わせをするように、イギリス、合衆国、カナダはこれらの国々が独立する際に、形ばかりの経済援助を行います。その見返りに、カナダは労働者を家事労働、農場や工場をはじめとする単純労働の担い手として自国に受け入れるという契約をしました。そのため、カナダにはカリブ海地域の移民が多いのです。

■ヨーク大学（カナダ）とトロントでの生活

現代では、カリブ海地域にルーツのある人びとのみならず、アフリカやアジアからの移民もたくさんいます。もっとも割合が多いのがインド系、次に中華系で、トロントの住人の半分は非白人です。キャンパスを歩く学生も大半が非白人で、ムスリム（イスラム教徒）も多い。イギリスの大学に比べ、教員も圧倒的に非白人が多いのが特徴です。少なくとも私にとっては、非



トロント郊外ストラトフォードで毎年十月に演劇祭が行われる。

常に過ごしやすい環境でした。大きな大学ですので、図書館にも書籍や論文、資料が豊富に揃っており、研究環境は問題ありません。それに加え、やはりトロントに来てよかったな、と思ったのは、カリブ海地域出身の詩人や作家の朗読イベント、研究者を招いての書店や大学でのイベントがあり、それらに頻繁に出かけては、作家や研究者らと言葉を交わせたことです。これは、得難い財産の一つです。

トロントならではのイベントとして特記すべきは、プライド・パレードとカリバナです。トロントは北米の中でもセクシャル・マイノリティに対して寛容であり、権利の獲得と拡大に非常に積極的な役割を果たしてきた、世界での有数の場所としても知られています。そのため、毎年6月になると街がプライド・パレード一色になります。誰もが知る有名企業もチームを作って街を練り歩きます。ビジネス臭が強い点は気になりましたが、一度は足を運んでみるべきかもしれません。

もうひとつのカリバナでは、カリブ海地域の文化として重要なカーニバルを行います。8月初めの数日間、カリブ海地域出身の移民が中心になって大きな山車^{だし}を作成し、サウンドシステムで、レゲエやソカといったカリブ海地域のダンスミュージックを大音量でかけながら集団で練り歩きます。日本でカーニバルといったらブラジルのサンバを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、サンバよりもリズムや体の動かし方が激しいかもしれません。カリブ海地域にルーツのある人びとのみならず、カリブ海地域に縁のない人びとも参加し、食事や飲み物、音楽やダンスを通じて、まずはカナダ社会にこの地域にルーツを持つ人びとがいること

を知らしめるという意味で重要な機会です。

とはいえ、私の研究は、小説や詩、戯曲、それに研究書を読み、論文を書くという作業が中心なので、基本的に一人で行うことがほとんどです。(その合間に翻訳を手がけることもあります。)そのため、どうしても生活が単調になりがちです。もちろん、旅行や研究発表に出かけるということも可能ですが、まだコロナ禍でしたので、2022年の秋頃までは、それほど移動も自由にできませんでした。そのため、いかに休憩時間や余暇をうまくとり、単調でない生活を送るかということが最大の関心事でした。

トロントは歴史が浅く、人工的な街です。都市の中心にヤング・ストリートという幹線道路が一本通っており、その大通り沿いを中心にタワー・マンションが膨大に立ち並んでいます。建物と建物の間も広いので、地図で見るとより歩く距離が長く、徒歩で移動するには向いていません。私の場合、たいていの場所はバスや地下鉄で出向いていました。

■スーパーマーケットとフードコート

重要な気分転換の場となったのが、スーパーマーケットです。冬が長く厳しくなるであろうと事前に予測していたので、なるべくスーパーマーケットの近くに住もうと考えておりました。広大な敷地の中に売り場があるので、一周するだけでも散歩と同じくらいの歩数を歩くことになります。

トロントの地下鉄の駅には、フードコートが併設されています。ファーストフード店も多いのですが、地



バルバドスの作家ジョージ・ラミングの名を冠した小学校。



トリニダードの軽食ダブルス。

元の企業や各国料理の店もあります。近所にはインド料理、中華料理、ジャマイカ料理やイラン料理の店がフードコートにあり、よく通いました。

フードコートは人を観察するのに最適の場所です。おしゃべりしたり、家族団欒をしたり、仕事の合間に一息ついたり。恋人同士が親密に話し合ったり。音の出ないテレビを眺めたり、携帯電話やパソコンで作業したり。聞こえてくる言語は英語ですが、多くが第一言語ではない人が喋る英語です。さらに朝鮮語、中国語、アラビア語、ペルシア語、ヒンドゥー語などを喋る人たち。夏には公園でイラン人の老人がバックギャモンに興じ、それを眺める人々がいるのですが、冬はフードコートに移動します。

■食事からみる非西洋社会とカリブ海地域

トロントにはほかに、アフリカ料理のお店もあり、コートジヴォワール料理、ナイジェリア料理、エチオピア料理にアクセスすることもできます。さらに、パレスチナ料理のお店もあります。店員の青年と会話をしましたが、その際に教えてもらったのが、トロントのお店は支店であり、本店はヨルダン川西岸のラマッラーにあるようです。パレスチナの最も高名かつ有名な民族詩人であるマフムード・ダルウィーシュも通っていたようです。ちなみに、パレスチナ料理のファラフェル（ひよこ豆のコロッケ）がイスラエル料理として紹介されることがありますが、こうした事態は食の植民地化と言えます。

その他、何回も口にしたい食事、いつでも食べたい

と思わせるのが、アキー・アンド・ソルトフィッシュです。アキー（ackee）というのはカリブ海地域でしか取れない木の実なのですが、毒性があるため、独自の処理を施して食用にします。カリブ海地域の中でもジャマイカでしか食べません。大航海時代のポルトガルの航海士の常食であった干しダラを、水につけて塩抜きしたものがソルトフィッシュです。その二つの食材に、彩りゆたかな野菜をたくさん加えて炒めます。ライス・アンド・ピーズという、硬めの米に豆を加えてハーブとココナツミルクで炊き込んだご飯とともに食べます。これが非常に美味しいのです。アキーのとろけるような食感と旨み、それに塩ダラの塩味が加わって最高の食べ応えです。（かわりと言ってはなんですが、バルバドスに出張で訪れた際に味わった郷土料理のクークー、トリニダードの軽食ダブルスの写真を掲げておきます。）

■おわりに

以上、トロントでの生活を中心としたカナダ・ヨーク大学滞在記でした。なんだ食べてばかりじゃないか、と思われるかもしれませんが、ですが、カナダ社会やカリブ海地域の多様さ、文化の複雑さのみならず、私の研究分野とのつながりも感じていただけたら幸いです。



モントリオールの街角。国民的歌手で作家のレナード・コーエンのミュール。



バルバドスの郷土料理クークー。コーンミールとオクラに火を通して成形したものに、トビウオのフライ。

